

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月24日現在

機関番号：32682
研究種目：基盤研究 (C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520587
研究課題名（和文） 外国語学習者のためのスピーチプロダクションモデルの開発と応用
研究課題名（英文） Development and Application of Speech Production Model for Foreign Language Learners
研究代表者
尾関 直子 (OZEKI NAOKO)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：00259318

研究成果の概要（和文）：プレッシャーのかかる状況において即興で話した場合、どのような要因がスピーキングの正確さ、流暢さ、複雑さに影響を与えているかを調査した。質問紙調査とスピーチ・プロダクションの分析から、言語的要因だけではなく認知的要因（プランニングをしたり、モニタリングをすること）、情意的要因（不安や自信）がパフォーマンスに影響を与えていることが分かった。このことにより、外国語学習者も認知的要因、情意的要因を考慮すれば、即興で話すパフォーマンスを改善できることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study investigates psychological factors that affect the accuracy, fluency, and complexity of unplanned speech in the L2 when performing under pressure. The results of the questionnaire and speech analysis showed that not only language proficiency but also psychological factors were related to the speech performance of L2 learners. This finding suggests that L2 learners would be able to improve their speech performance by taking cognitive and affective factors into account.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,040,000 | 800,000 | 240,000 |
| 2011年度 | 910,000 | 210,000 | 700,000 |
| 2012年度 | 1,300,000 | 30,000 | 1,000,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：スピーキング，スピーチ・プロダクションモデル

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学生の「即興で話す」能力

中央教育審議会（文部科学省，2008）は、「高等学校の外国語においては、『聞くこと』、『話すこと』を中心としたオーラルコミュニケーションの指導が十分に行われていない」こと，さらに「単に受信した外国語を理解するにとどまらず，コミュニケーションの中で自らの考えや体験などを「話すこと」や「書くこと」を通じて，発信することが可能となるような指導を充実するように改善を図るべき」ことを指摘している。そのような提言を受け，高等学校外国語（英語）の新学習指導要領（文部科学省，2009）では，「話すこと」と「書くこと」を重視した英語表現Ⅰ・Ⅱという科目を新設し，その内容に「即興で話す」という項目を加えた。この「即興で話す」という能力は，これまでの日本の初等中等教育における英語の授業では，ほとんど重視されてこなかった能力である。

このように，中学・高校で「即興で話すこと」を重要視されない授業を受け，大学に入学してきた学生たちは，英語の4技能のなかでも，とりわけ話すことが苦手であると認識している（JACET 実態調査委員会，2006）。大学生の多くは，あらかじめ話す内容を準備することが可能であれば，ある程度の正確さ，流暢さ，複雑さを伴ったスピーチやプレゼンテーションを行うことができる（Bygate, 1999; Ellis, 2003, 2005; 尾関, 2004）。しかし，あらかじめ準備する時間がほとんど与えられず，話している間に考える時間や余裕がない教室内の質疑応答やタスク活動においては，学生たちは単語のみ，もしくはフレーズのみで発話することが多い。これらのことから，大学生にとって，自分の意見や考えを「即興で話すこと」は，非常に難しい活動であると考えられる。

(2) スピーキングタスクの先行研究

大学生が即興で自分の意見や考えを話すことができるようになるためには，どのような指導方法が有効であるのだろうか。これまでの先行研究を整理すると，学習者がタスクを行う前に行うプランニング（pre-task planning）やタスクを行っている最中に行うプランニング（within-task planning）が発話に与える影響については，比較的，多くの研究が行われている（e.g., Ellis, 2003, 2005; Nitta, 2005; Ortega, 1999, 2005; Skehan, 1998）。例えば，タスクをリハーサルする機会を与えられた場合は，スピーキングの正確さ，流暢さ，複雑さのすべてが向上する（Bygate, 1999）。また，タスクを準備する時間が与えられれば，流暢さ，複雑さは増すことが指摘されている（Crookes, 1998; Foster & Skehan, 1996; Yuan & Ellis, 2005）。さらに，タスクを行っている最中にプランニングを行うと，流暢さは向上しないが，複雑さと正確さが増すことが明らかにされている（Ellis, 1998; Yuan & Ellis, 2003）。しかしながら，あらかじめ何を話すのかについて準備する時間があまりなく，プレッシャーがかかる状況下でのスピーキングに関しては，これまでほとんど研究が行われていない。

2. 研究の目的

申請者らの前回の基盤研究 C (H19~H21) において，プランニングの時間がなく，プレッシャーがかかる状況下でのスピーキング（即興で話す状況）においては，TOEIC などで測定される言語習熟度と同じように，不安感や自己効力感などの心理的要因が学習者の発話に影響を与えていることが明らかになっている。しかし，スピーキングの一連のプロセスにおいて，そのよう

な要因がどういった役割を果たしているのかは未だ定かではない。より具体的には、一般に、スピーチ・プロダクションには、概念が生成される「概念化」、その概念が言語化される「形式化」、形式化された言語が音声となる「音声化」の3つのプロセスが仮定されるが (Kormos, 2006; Levelt, 1999)、心理的要因がどのプロセスに、どの程度影響しているかについては明らかではない。また、スピーチ・プロダクションを扱った従来のモデルは、プランニングやモニタリングなどの認知的要因と語彙情報や統語情報などの言語的要因を扱ったものであり、先述した心理的要因は考慮されていない。さらに、従来のモデルは、母語話者を想定したモデルであり、外国語学習者のためのモデルではない。以上の点を踏まえ、本研究では、スピーチ・プロダクションモデルの3つのプロセス(概念化、形式化、音声化)のうち、どのプロセスに、どの程度心理的要因が影響しているかを明らかにすることにより、心理的要因を組み込んだ外国語学習者のためのスピーチ・プロダクションモデルを構築する。

3. 研究の方法

本研究の計画・方法は、つぎの2段階から成る。(1) **実験段階**：学習者の心理的要因は、スピーチ・プロダクションモデル (Levelt, 1999) のどの段階に影響を与えているのかを明らかにする、(2) **調査段階**：(1)で得られた知見に基づき、心理的要因を組み込んだ形でスピーチ・プロダクションモデルを精緻化し、その妥当性を検証する。具体的には、以下の通りである。

(1) **実験段階**：申請者らのこれまでの研究成果から、プランニングがなく、なおかつ話す内容を考える余裕がない状況下においては、TOEICなどで測定される言語

習熟度と同様程度に、不安感や自己効力感などの心理的要因も学習者のスピーキングに影響を与えることが明らかになっている。本実験では、Levelt (1999) のスピーチ・プロダクションモデルを基盤とし、上記の心理的要因がスピーキングプロセスのどの段階に、どの程度の影響を与えているのかを調査する。

目的：一般に、話者がメッセージを伝えようとするとき、まず概念が生成される(概念化)、その概念が語彙情報を活用して言語になり(形式化)、最後に言語化されたメッセージは音声となり(音声化)、アウトプットされると考えられている (Kormos, 2006; Levelt, 1999)。このプロダクションモデルに基づき、心理的要因がとりわけ**概念化**と**形式化**のプロセスとどのような関連を持っているのかを明らかにする。

調査協力者：研究代表者、研究分担者の勤務校の大学生 40 名

調査方法：スピーキングタスクの発話分析、申請者らの前科研 (H19~H21) で大学生 363 人に行った調査から作成した心理的要因に関する質問紙を使った調査 (Ozeki et al., 2009)

調査内容：

A と B の各グループに属する協力者は、プランニングがなく、なおかつ話す内容を考える余裕がない状況下のもと、制限時間 3 分以内に 4 枚の絵を見て物語を作る (Heaton, 1975) というスピーキングタスクを行う (内容は録音・録画する)。スピーチは、文字化し、発話分析を行う。また、タスク終了後に、心理的要因に関する質問紙調査を実施する。両者の分析結果から、スピーチ・プロダクションモデルのどの段階である概念化に心理的要因がどのよう

な影響を与えているのかを明らかにする。

(2) 先の実験で得られた研究成果を踏まえ、心理的要因を組み込んだスピーチ・プロダクションモデルを構築し、その妥当性を大学生に調査協力者になってもらい、検証する(調査段階)。その際、例えば、心理的要因が言語の概念化と強く関連があると判明した場合、概念化を容易にするには、スキーマを活性化するのが有効なのか、もしくは、話すときの論理展開(時系列、比較、問題解決、原因結果)などに習熟するのが有効なのかなどについて、より詳細に調査する。逆に、心理的要因が言語の形式化と強く関連があると判明した場合、形式化を容易にするには、タスクに取り組む前にタスク遂行に必要な単語を与えるのが有効なのか、ディスコースマーカなどのつなぎ言葉を与えるのが有効なのかなどについて、より詳細に調査する。以上のプロセスを経て、学習者の不安や自己効力感などの心理的特性を反映した精緻なモデルを構築することができれば、効果的なスピーキング指導を行う上でのより具体的な視座を提供できると考える。

4. 研究成果

3年間に合計4回の実験を試行錯誤しながら繰り返し、以下のことが分かった。

(1) 心理的要因が言語の概念化に強く影響を与えていると考え、被検者を実験群と統制群に分けて異なった2種類の実験をした。一つ目の実験では、実験群は、4枚の絵から構成される物語の順序をばらばらになったものを並び変えて物語を作り、統制群は正常に並んでいる絵に基づいて物語を作った。この結果では、物語の筋があまり難しくないことが要因であると思われるが、実験群と統制群にスピーチの正確さ、流暢さ、複雑さにおいて、統計的に差は見つけ

られなかった。

(2) 実験を考え直し、二つ目の実験では、実験群は4枚の絵から2枚を抜き取り、自分でその抜けている部分の物語を作り、統制群は正常に並んでいる絵に基づいて物語を作った。この実験結果において、情意的要因がスピーチの流暢さや複雑さに影響を及ぼしていることが分かった。特に、習熟度が低い学生には、この影響が大きいことがわかった。

(3) 母語話者用に作れた Levelt のスピーチ・プロダクションモデルには、情意的要因が全く記載されていない。本研究により、習熟度が高い学習者には、概念化において操作をしてもほとんど影響がないことが分かった。母語話者の場合、習熟度はいうまでもなく非常に高いので、Levelt のスピーチ・プロダクションモデルには、情意的要因が記載されていないのではないかと推測される。従って、外国語話者のスピーチ・プロダクションモデルには、情意的要因を入れる必要があることがわかった。

以上に研究成果を踏まえ、比較的低習熟度が多い日本の英語学習者にとっては、概念化を容易にする操作を行えば、スピーチ・プロダクションのパフォーマンスが増すことがわかり、授業でタスクを行うさいには、十分なブレンストーミングを行ったり、スキーマを活性化することが重要であることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 尾関直子, CAN-DO リストと自律した学習者, 東北学院大学論集, 査読有, 97巻, 2013, 147-158.
- ② 大和隆介, 三上由香, 日本人学習者の動機づけに関する調査と考察, 京都産業大学『教職研究紀要』, 査読無, 7巻, 2012, 1-22

③ 廣森友人, 英語学習者の動機づけを高める指導と実践: 動機づけ評価の診断的活用, ERELE(Annual Review of English Language Education in Japan), 査読有, 23 巻, 2013, 367-372

④ Hiroyuki Matsumoto, Tomohito Hiromori, & Akira Nakayama, Toward a tripartite model of L2 reading strategy use, motivations, and learning beliefs, System, 査読有, 41 巻, 2013, 38-49

⑤ Tomohito Hiromori, Hiroyuki Matsumoto, & Akira Nakayama, profiling individual differences of successful and unsuccessful L2 readers, The Journal of Asia TEFL, 査読有, 9 巻, 2012, 49-70

[学会発表] (計 8 件)

- ① Ryusuke Yamato, What effects does strategic planning have on a writing task? The 33rd Annual Thailand TESOL International Conference, 2013 年 1 月 25 日, Thailand
- ② 尾関直子, 新しい英語教育と授業指導, 日本英語検定協会新学習指導要領をふまえた授業の創造 (招待講演), 2012 年 12 月 26 日, 東京
- ③ Naoko Ozeki, Integration of the Four Skills and TBI, 岐阜県教育委員会グローバルコミュニケーション能力育成支援事業 (招待講演), 2012 年 12 月 4 日, 岐阜県
- ④ 尾関直子, 「英語表現 I」と「英語表現 II」の指導の在り方, 文部科学省初等中等教育高等学校各教科教育課程研究協議会外国語科部会 (招待講演), 2012 年 11 月 19 日, 東京
- ⑤ 大和隆介, How do various types of strategic planning affect story-retelling task? The 10th Hawaii International Conference on Education. 2012 年 01 月 07 日 Hilton Hawaiian Village, USA
- ⑥ 尾関直子, アジアで教える日本語・英語— 学習者の多様性に迫る 自律した学習者を育てる, アジアで第 2 言語を学び教える研究集会 (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院, 招待講演) 2011 年 11 月 06 日 北海道大学東京オフィス
- ⑦ 尾関直子, Language Learning Strategies for Tertiary Education, The JACET 50th (2011) Commemorative International Convention, 2011 年 8 月 31 日 西南学院大学

⑧ 尾関直子, Task-Based Instruction: Theory and Practice, 山梨県教育委員会 (招待講演) 2011 年 8 月 08 日 山梨県教育センター

[図書] (計 1 件)

① 村野井仁, 渡部良典, 尾関直子, 富田祐一, 成美堂, 統合的英語科教育法, 2012, 240

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾関 直子 (OZEKI NAOKO)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号: 00259318

(2) 研究分担者

大和 隆介 (YAMATO RYUSUKE)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号: 60298370

(3) 研究分担者

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)
明治大学・国際日本学部・准教授
研究者番号: 30448378